オリンピックスポーツ文化研究
2021. 6　No. 6　87 ― 102

原著論文

第一次世界大戦後のフランス・スポーツ界とクーベルタン：1924 年オリンピック・パリ大会の開催まで[1]

星　野　　映（早稲田大学）[2]

Abstract

This article examines how French sport world changed its relationship with Pierre de Coubertin in connection with changes in the international political situation immediately after World War I. And then, this is an attempt to examine that by focusing on the process over the Olympic Games in Paris in 1924.

After the World War I, as international sports games, matches and competitions became more active, sports became recognized as arousing nationalism, and the nation state became actively involved in it. Even in France, while sports were becoming more popular to the mass, people were paying more attention to the result in international sports competitions, and the government is focusing on sports as a means of regaining its prestige.

In addition to trying to achieve excellent results in international sports competitions, France began to aim to lead the international organization of sports. Then, the model, that "one federation controls one sport" that spread to the sports world in France after World War I, will extend to the international sports world under the initiative of France.

While Coubertin didn't like the new force in the French sport world, he continued to have inflnerce in the IOC. Thus, the French sports world and Coubertin were in controversy. However, they agreed that each wanted to hold the Olympic Games in France in 1924.

抄録

本研究は，第一次世界大戦後のフランスのスポーツ界において，1924 年のオリンピック・パリ大会をめぐる論議がどのように展開していったのかということを，国際政治の変化やピエール・ド・クーベルタンとの関係も踏まえつつ，明らかにしようとするものである．

一次大戦後には，国際試合が活発化するなかで，スポーツがナショナリズムを喚起するものとして認識されるようになり，そこに国家が積極的に関与するようになっていた．スポーツの大衆化が進むフランスでも，人々は自国の代表選手の成績に一喜一憂するようになり，政府は国家の威信を取り戻す手段としてスポーツに注目するようになった．

[1] French sport and de Coubertin after World War I: Until the 1924 Paris Olympic Games
[2] Hoshino Utsuru, WASEDA University

フランスは，国際スポーツ大会で優秀な成績を収めることに加えて，スポーツの国際的な組織化を主導することを目指すようになり，一次大戦後のフランスにおいてスポーツ界に広がった「一つの競技に対して一つの連盟がその統括をする」というモデルは，フランスの主導により国際スポーツ界にも及んでいく．

クーベルタンは，スポーツのあり方をめぐって，この新たなフランス国内の勢力と対立関係にあったが，IOC ではその影響力を持ち続けた．そして，対立していたはずのフランス･スポーツ界とクーベルタンであったが，それぞれ 1924 年にオリンピックをパリ（フランス）で開催することを望んだという点で，一致することになる．

Keywords: World War I, Sport Politics, Sport nationalism, Olympic Games in Paris

キーワード：第一次世界大戦，スポーツと政治，スポーツ・ナショナリズム，パリ・オリンピック

1．はじめに

オリンピックとナショナリズムの関係は，これまでさまざまに議論されてきた．オリンピックやサッカーワールドカップなど国際的なスポーツ競技大会の成績が，現在もみられるようなかたちでナショナリズムを喚起するようになったのは，第一次世界大戦がきっかけであったとされている[1]．この頃から，各国の政府はスポーツに政治的役割を期待するようになった．

また，国際情勢がオリンピック大会参加の可否に影響を与えるようなスポーツと政治の結びつきも，一次大戦後に始まったものとされている．実際，ベルギー・アントワープで開催された 1920 年のオリンピック大会（以下,「アントワープ五輪」とする）には，大戦の責任があるとされたドイツなどの中央同盟国は，その参加が認められなかった[2]．これがオリンピックの歴史において初めての，参加をめぐる代表単位での排斥である．

このようにスポーツ界が政治的色合いを帯び始めるなか，そこでの組織化を主導したのがフランスであった．詳しくは後述するが，フランスが国際的なスポーツの組織化を推し進めていったことは，一次大戦後の国際的な政治状況におけるフランスの姿勢と軌を一にするものであった．

その一方で，同じフランス人であり，近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタンは，オリンピックの非政治性を主張し続けていた．クーベルタンにとってスポーツは，政治的対立を超えるもの，あるいは中立であるべきものであった[3]．彼のそうした考えは人類史上初めての世界大戦を経験したあとも変わることはなかった．例えば，1919 年から 1920 年の IOC 総会においても，「スポーツの地勢学がヴェルサイユ条約から生じた新たな政治的地勢学に同調するべきではない」ということをクーベルタン自身は繰り返し主張していたという[4]．

ところで，一次大戦後のフランス社会は，大衆文化が発展を遂げる時代であった．戦争で受けた精神的なダメージを癒すものとして，人々は娯楽を求めたのである．電気が一般家庭に広く行き渡ることと相まってラジオ放送が大きく普及し，一次大戦を経て大国化しゆくアメリカ産の映画上映が人気を博していった．

そうしたなかでスポーツも多くの人々のあいだに広がっていった．一次大戦までは一部の人に限定されていたスポーツであったが，戦後はその実践者数が増加しただけでなく，「スポーツを観戦する」ということも浸透していった．また人々が実際にスタジアムで観戦することに加えて，ラジオやスポーツ専門の雑誌，あるいは新聞のスポーツ欄など各種メディアを通じて，スポーツの勝敗

結果を知るようにもなった．

スポーツ・メディアのなかでも特に流通量が多かったのが日刊紙の『ロト（L'Auto)』であった[5]．1903年にツール・ド・フランスを開始していた『ロト』は，戦後の1923年には自動車のル・マン24時間レースを創設するなど，スポーツ大会の主催や後援にも熱心に取り組み，新聞の売り上げも伸ばしていった．1923年には1日に27万7000部，ツール・ド・フランスの開催期間には日に50万部近くが刷られていたというが，10年後には36万4000部にまで発行部数を伸ばしていった[6]．

このように，一次大戦後のフランスにおけるスポーツは，「政治化」すると同時に「大衆化」も進んでいった．まさにこの時期のフランスにおいて，最も大きなスポーツイベントだったのが1924年にパリで開かれた第8回オリンピック大会（以下，「パリ五輪」とする）であった．

1924年のパリ五輪の開催については，「ピエール・ド・クーベルタン男爵が，大会をパリで再び開催することをIOCに納得させることができた」ためであるとされ，クーベルタンの意向と尽力によることが大きかったとされている[7]．ところが実際には，すでに述べたように1920年のアントワープ五輪には，国際的な政治情勢が理由となっていくつかの国が参加を認められず，スポーツ界はクーベルタンがオリンピックに期待した平和的理念とはかけ離れた方向に進んでいた．

そこで本論文では，一次大戦後の国際的なスポーツをめぐる状況やクーベルタンとの関係のなかで，フランスのスポーツ界がパリ五輪の開催に向けてどのように展開していったのか，いかにして大会の開催実現に至ったのか，ということを明らかにしていきたい．対象時期は，第一次世界大戦の講和会議がパリで開かれた1919年からパリ五輪が開催された1924年までとする．

これまでにも一次大戦後のフランスにおけるスポーツは，国際的な状況と絡めて議論されてきた[8]．他方で，2024年にパリでオリンピック大会が開催されることが決定して以降，1924年のパリ五輪を中心にオリンピックと政治に関する研究も盛んになっている[9]．こうした先行研究を十分に生かしつつ，本論文は，パリ五輪と政治の関係を，フランス国内と国外それぞれの複雑な状況に加えて，クーベルタンとの関係性も踏まえて，より重層的に検討していこうとするものである．

主に扱う一次資料としては，当時のフランスで刊行されたスポーツ誌紙，特にもっとも普及していた『ロト』の記事を中心的に用いる．なお，フランス語の翻訳はすべて筆者自身によるものである．

2．一次大戦後の国際スポーツ界とフランス

本節では，一次大戦後のフランスにおけるスポーツと，それをとりまく国際スポーツ界の動向を，先行研究に依拠しつつ国際関係や諸組織間の関係に着目しながらみていく．特に，一次大戦後に各国間で高まったとされるスポーツをめぐるナショナリズム，新たな時代のなかで迎えたフランス社会の変化とそれに伴うスポーツ諸組織の成立や改編，そして，そのフランスが主導的役割を担おうとした国際スポーツ界の組織化について，詳しく述べていく．

2-1　スポーツにおけるナショナリズムとスポーツの「政治化」

オリンピックをはじめとする世界規模のスポーツ大会において各国のナショナリズムが明確に表出するようになったのは，第一次世界大戦が契機であると考えられている[10]．

一次大戦は，1914年7月から1918年11月にかけて，史上初めて世界規模で繰り広げられた戦争である．各国は軍事力のみならず経済力や科学技術力などあらゆる国力を戦争に注ぎ込んだ．結果として一次大戦は，多くの人々が動員され，多大な犠牲が出る国家総力戦となった．

この総力戦の経験と，ヴェルサイユ講和条約による賠償や帝国の解体，それに伴う領土などの地

政的変化は，ヨーロッパを中心に各国でナショナリズムを増幅させ，各国同士の対抗意識は一次大戦以前よりも強まることになった．他方で，ヴェルサイユ条約の発効日である1920年1月16日に，国際的な平和維持機構として国際連盟が設立された．これ以降，各国同士のつながりは複雑に絡み合うようになり，世界的に相互依存と一体化が進んでいった．

こうしたなかでスポーツにおいても，一次大戦後に国際的な結びつきは強まり，国際対抗試合なども積極的に展開されるようになっていた．表1は，フランス代表チームがどの競技で，どの国と，いつから対抗戦を行うようになったのかを示したものである．一次大戦前まではほとんどが旧大英帝国の国々とのラグビーの対抗試合であったが，一次大戦後にはヨーロッパ近隣諸国と陸上競技やサッカーの対抗戦が増えていったことがわかる[11]．

スポーツをめぐる国際的な結びつきは各国チーム間の相互交流を増やしていった一方で，各国間の対抗意識を強めることにもつながっていた．広がるスポーツ・メディアを通じて，人々は自国のチームに関する情報を得て，試合の勝敗を知り，日々一喜一憂するようになっていた．

たしかに，一次大戦前にもオリンピックがナショナリズムを喚起するということは言われていた．しかしながら，その時代はスポーツの実践者が限定的であり，また国際的なスポーツ大会も「世論を掴み，政治家の関心を引きつける」ほどの影響力はなかった[12]．やはりスポーツが国民のあいだにナショナルな感情をかき立てるようになるのは，スポーツが大衆に広がって，人々が日常的にスポーツを実践したり観戦したりするようになり，また，国家間の対抗戦が増加していく一次大戦後の社会状況においてであった．

スポーツ・ナショナリズムをめぐって戦前と戦後で最も異なる点は，スポーツに国家が対外的な政治的意味を見出し，積極的に関与するようになったことであろう．大会の増加に伴い，一次大戦後のヨーロッパ各国において，人々の国民意識をかき立てるスポーツ・ナショナリズムは大きく拡大し，それに各国の政府は注目するようになった．国際的な競争の舞台で良い成績を収めることは国家の威信を示すことにつながり，スポーツをめぐる各国間の競争心や対抗意識はますます高まっていった[13]．

このことはフランスも同様であった．1920年1月20日には，フランス公教育省に体育スポーツ課が設置され，この長には前年からフランス競技スポーツ連盟（Union des sociétés françaises de

表1　フランス代表チームの競技別・国別の第1回対抗試合（注1）

年	対戦国	競技
1902	カナダ	ラグビー
1906	ベルギー	ラグビー
1906	イングランド	ラグビー
1906	ニュージーランド	ラグビー
1907	南アフリカ	ラグビー
1908	ウェールズ	ラグビー
1909	アイルランド	ラグビー
1910	スコットランド	ラグビー
1912	ベルギー	陸上競技
1920	イングランド	サッカー
1920	ベルギー	競泳
1921	アイルランド	サッカー
1921	イングランド	陸上競技
1921	スイス	陸上競技
1921	スウェーデン	陸上競技
1921	イタリア	サッカー
1921	ベルギー	サッカー
1921	オランダ	サッカー
1922	スペイン	サッカー
1922	ノルウェー	サッカー
1922	フィンランド	陸上競技
1923	スイス	サッカー
1924	ルーマニア	ラグビー

sports athlétiques，以下「USFSA」とする）の会長を務めていたガストン・ヴィダルが選ばれた．ヴィダルには，先の一次大戦を経てさらに低下していたフランスの国家としての威信を，スポーツを通じて再び世界に示すことが期待された．ヴィダルは，1920年アントワープ五輪の直前に，「スポーツは国家の事柄になった」と述べている[14]．オリンピックにおいても，いまや重要なのは「参加すること」ではなく，そこで勝利することになっていったのであった．

同じく1920年にはフランス外務省（Ministère des Affaires étrangères）が，海外事業局（Service des œuvres françaises à l'étranger）に「観光・スポーツ」部門（Section du Tourism et du Sport）を設置した．この海外事業局は，文字通り国外に向けたフランスのプロパガンダを担う部局である．スポーツも国家のイメージを復興し強化する装置として期待され[15]，そのために海外事業局も3つの方向性で事業を進めようとした．その3つとは「IOCにおけるフランスの影響力の強化」，「外国との試合の増加」，そして「国家の有力選手を映画によって宣伝すること」であった[16]．本論文ではこのうち最初の2つが主に関係してくるが，いずれにせよ，この頃からフランス政府はスポーツを，国家のイメージを宣伝するのに有用なプロパガンダ装置としてみるようになっていたのである．

こうしてスポーツがナショナリズムを喚起するものとして期待され，政府が関与するようになったことと相まって，国際試合には政治性が伴うようになった．一次大戦後の複雑な国際政治情勢は，スポーツの世界にも明確に影響を及ぼすようになっていたのである．

すでに1916年に開催されるはずだったドイツ・ベルリンでのオリンピック第6回大会は，戦争の真っただ中で中止になっていた．また，先に述べたように，アントワープ五輪にも大戦時の中央同盟国は参加が認められなかった．他に，ヴェルサイユ講和条約の調印と同時期の1919年6月から7月にフランス・パリで開催された連合国軍競技大会（Les jeux interalliés）でも，その名の通り参加チームは一次大戦の連合国に限定されたのであった．

また，オリンピックなど各国代表が一堂に会する競技大会だけでなく，1つの競技における各国代表チーム間の国際対抗試合をめぐっても，大戦後の政治状況が明確に影響していた．例えば，1924年に至るまでサッカーのフランス代表チームが対戦したのは一次大戦の連合国あるいは中立国のチームだけであった．その後，しだいにオーストリアやハンガリー，ユーゴスラヴィアなど一次大戦で敵対した国々の代表チームと対戦するようになるのだが，ドイツに関しては，大戦で直接的に激しく戦闘を繰り広げ，領土を奪い合ったことで国民の間にも反ドイツ感情が高まっており，直接対抗試合をするのは1931年と講和条約の発効から10年以上かかることになる[17]．こうして一次大戦後の国際的な政治状況は，スポーツの場に直接的に影響を及ぼすようになっていた．

一次大戦後の国際情勢を反映しているという点では，スポーツ界におけるアメリカ合衆国の強さも象徴的であった．

大戦に1917年から連合国側で参戦したアメリカは，国土が戦場と化すことがなかったこともあってヨーロッパほどの甚大な犠牲を出すことはなく，また戦争を長期化させるヨーロッパの国々に武器などの物資を売りつけるなどして莫大な利益を生み出していた．債務国から債権国へと転化したアメリカは，一次大戦後の国際社会で大国としての覇権を握るようになっていた．

このアメリカの国力が，スポーツにおいても現れていた．先に述べた連合国競技大会は，アメリカ陸軍のジョセフ・パーシング大将とYMCAが協力して，ヨーロッパに残る連合国軍兵士のためのスポーツ大会として開催を主導したものである[18]．

連合国軍競技大会に向けてはアメリカ人兵士たちがパリ・ヴァンセンヌの森に競技場を建設し，

この競技場が大会開会式の日にフランスに寄贈された．2万5000人を収容できるこの競技場は，アメリカ軍のパーシングから「スタッド・パーシング（Stade Pershing）」と命名され，1924年のパリ五輪においてもメインスタジアムの1つとして使用されることになる[19]．

同大会には19か国から1,415人が参加したが，そのうち282人がアメリカ軍，253人がフランス軍の兵士であった．総合順位ではアメリカがフランスを上回って1位となり，アメリカ人兵士の強さを見せつける結果となった[20]．また，アメリカ選手の強靭な体格や，先進的なトレーニング方法なども，大戦直後のフランスの人々にとってはアメリカの国力を示すものとして映っていた．

さらに，オリンピックにおいても，スポーツ大国としてのアメリカの覇権は続いた．一次大戦以降，1932年のロサンゼルスオリンピックまで，アメリカは金メダルの獲得数で他国を圧倒し続けることになる．

このように一次大戦後から政治性を伴いながら活発化していったスポーツの国際化は，フランスの主導によるところが大きかった．国際スポーツ界における主導性は，当時のフランスの政治外交における方針と一致するものであり，フランス国内スポーツ界の変化とも相互的に連関しながら展開していくことになる．

2-2　一次大戦前のフランス国内におけるスポーツ界の対立

第一次大戦以前，フランスで最も大きなスポーツ組織はフランス競技スポーツ連盟（USFSA）であった．1889年1月に設立されたUSFSAは，あらゆるスポーツを一括して組織した連盟で，主な加入者はパリを中心に貴族や新興ブルジョワジーの青少年男子であった．その傘下に競走やサッカー，ローン・テニス，航空などスポーツごとの小委員会を置き，結社の自由を定めた1901年7月1日法の成立以降は多くのスポーツクラブが加盟した．例えば1890年には13団体と2,000人にすぎなかった加盟数が，一次大戦前にはおおよそ1,700団体と30万人に激増していた[21]．クーベルタンもかつてはUSFSAで事務総長を務めており，彼の近代オリンピック復興の活動の端緒となった1894年の演説は，USFSAの会合の中で行われたものである[22]．

クーベルタンに代表されるように，19世紀後半から一次大戦前までのフランスにおけるスポーツの主な担い手は，パリを中心とした貴族の若者や台頭しつつあった新興ブルジョワジーの人々であった．フランスのエリート層は，イギリスの上流階級との交流によって早くからスポーツを実践しており，また，スポーツは自分たちの専有物であるという意識があった．クーベルタンも「スポーツが労働者や女性に民主化し拡大していくことに賛成ではなかった」という[23]．

USFSAもそうした上流・中流階級の人々の集まりであり，厳格にアマチュアリズムを信奉している一方で，USFSAの方針に賛同しない人々によって新たな組織もつくられ始める．例えば，1903年にはキリスト教カトリック系のフランスパトロナージュ体操スポーツ連盟（Fédération gymnastique et sportive des patronages de France, 以下「FGSPF」とする）が設立された．FGSPFは，USFSAのヘゲモニーに反対して組織されたフランス連盟間委員会（Comité français interfédéral，以下「CFI」とする）の主要勢力であり，一次大戦前には1,500団体，15万人の登録者を有する一大組織となった[24]．

1905年に政教分離法が成立したこともあり，このFGSPFに対してUFSFAは反対の立場を表明し，自らは世俗的・非宗教的な組織であることを主張した．こうしてフランス・スポーツ界のイデオロギー闘争が激化していくなか，そのことを憂いたクーベルタンは，1906年にUSFSAの名誉会員から退いた．これに対してUSFSAや各種スポーツを代表する人々は，1907年1月に翌年のオリンピック・ロンドン大会への参加をめぐって，クーベルタンの個人的な影響力が及んでいた

全国オリンピック委員会の承認を拒否した．USFSAはオリンピックへの参加について，クーベルタンと全国オリンピック委員会だけでなく，各種連盟との議論を経て民主的に決定していくべきだと主張したのである[25]．このように，すでに一次大戦前にはクーベルタンと国内スポーツ界のあいだにスポーツへの考え方をめぐって隔たりができ始めていた．

フランスにおけるスポーツ界の対立構造はさらに深まっていった．1907年3月にはFGSPFが中心となって，USFSAに反対するいくつかのグループが結集し，先に述べたCFIを結成することになる[26]．

オリンピックへのクーベルタンの影響力や，政治的対立を深めるフランス・スポーツ界の危機を前にして，各種競技団体を取りまとめた純粋な競技スポーツ志向の組織を結成しようという機運が高まった．こうして1908年5月に作られたのが全国スポーツ委員会（Comité national des sports, 以下「CNS」とする）である[27]．

CNSの結成にはUSFSAの協力があったものの，フランス体操連盟やフランス射撃連盟など，もともとUSFSAに反対の立場を取っていた競技連盟も，純粋な競技志向という点でCNSに賛同する姿勢を示した[28]．CNSは，それぞれの競技連盟が自立するかたちを認めながら結集する組織であった．

1913年，CNSはオリンピック代表に関する決定権を獲得し，その傘下にフランスオリンピック委員会（Comité olympique français, 以下「COF」とする）を設置した．

CNSは，その設立経緯から，統一的な規則のもとフランス・スポーツ界を取りまとめるような普遍的なモデルを確立することを目的とした[29]．それぞれ単一の競技を統括する各種連盟を，統一された規則のもと同等に管理するという「一競技一連盟」のシステムが，CNSの設立によってはじめてフランスにおいて導入されることになったのである．

各種競技連盟の設立が増大するにつれて，フランスの普遍主義的価値観に沿ったCNSは，一次大戦を経てさらにその影響力を拡大させていくことになる．

2-3　一次大戦後のフランス・スポーツ界の変容

一次大戦が終わると，各種競技連盟が立て続けに設立され，CNSはその勢力を拡大させていった一方で，USFSAのプレゼンスは低下していった．

フランスで，あるいはヨーロッパでもっとも人気のスポーツであったサッカーに関して，USFSAに反対の立場でつくられたフランス連盟間委員会（CFI）は，1913年に国際サッカー連盟（Fédération Internationale de Football Association，以下「FIFA」とする）から，サッカーのフランス選手権を開催する権限を得ていた．CFIには，大戦前の1910年から，サッカーのプロ化をめぐってUSFSAを離れたジュール・リメが加入しており[30]，FIFAにおいても力のあったジュール・リメの意向が，フランス国内の動向に反映されるかたちとなったのである．

CFIは，1919年4月7日にジュール・リメを会長としてフランスサッカー連盟へと姿を変え，名実ともにフランスにおけるサッカーを統括する競技連盟になった．このサッカー連盟の設立を皮切りに，競技ごとの連盟の設立が相次いでいく．

1920年にはUSFSAのラグビーコミッションが解散し，フランスラグビー連盟を設立した．さらにアントワープオリンピックでの成績が振るわなかったことを理由に，フィールドホッケー，陸上競技，冬季スポーツ，テニス，水泳や，他にもローラースケート，バスク・ペロタなどが相次いで独立した競技連盟を設立していく[31]．

各種競技連盟の設立により，USFSAは急速に力を失い，1921年に組織を解散した．一方で，競技連盟の設立に比例してCNSは勢力を拡大していく．CNSを構成する連盟は1919年には22団体だったが，1921年には31団体にまで増加し

ていた[32]．

また，競技連盟を統括するという性質上，CNSのメンバーはそれぞれのスポーツを実践しあるいはクラブや連盟をマネジメントしてきた経歴を持つような，生粋の「スポーツ畑」出身の人々で構成された．こうしてフランス国内におけるスポーツ界の指導者は，クーベルタンのような貴族やUSFSAを主導したエリート層から，一次大戦後にはジュール・リメのような，それぞれのスポーツの専門家たちに取って代わられていった[33]．

スポーツをめぐるこのような変化は，一次大戦後のフランス社会の変化とあいまって生じていったと考えられるだろう．スポーツ・メディアの発達や人々のスポーツ欲求の高まりと相まって，大戦前には一部のエリート層の専有物であったスポーツが，より多くの人々に，日常的なものとして広まっていった．そうしたなか，アマチュアリズムに厳格な人々がさまざまな種目を嗜む従来的なスポーツのあり方に対して，専門特化し一部ではプロ化も進みつつあった競技スポーツの存在は，フランス・スポーツ界においては無視できないものとなっていた．

さらに，1922年3月にはCNSが政府によって承認された[34]．こうしてフランス国内ではCNSのもと「一つの連盟が一つの競技を統括する」というモデルが確立した．そして，このフランスのモデルは国際スポーツ界にも及んでいく．これは一次大戦後のスポーツを取り巻く変化と，国際政治におけるフランスの立ち位置が一致するかたちで展開されていった．

2-4　スポーツの国際化におけるフランスの影響

フランスは戦勝国ではあったものの，甚大な犠牲者数と国土の荒廃から精神的な打撃が大きかった．特に，国内で反ドイツ感情の世論の声が強まるなか国力の衰退を挽回したいフランスは，国際連盟など新たな国際秩序の形成において主導的立場をとり，国家の威信回復を図ろうとした[35]．こうした姿勢が国際スポーツ界におけるフランスの立場にも表れていた[36]．つまり，スポーツの国際的な組織化を主導することを通じて，国家としての威信を取り戻すことを求めたのである．

もともと一次大戦以前から，フランスとりわけパリは，イギリス由来のスポーツを世界に広げた「スポーツ第二の中心地」であるとされ，19世紀から20世紀初頭におけるスポーツの国際化に大きく貢献したとされる．それはフランスが有した世界規模のネットワークによるものであり，例えばラテン・アメリカやアフリカなどからの留学生たちのなかには，フランスで初めてスポーツの面白さを知ることになった人々も数多くいた[37]．

また，国際オリンピック委員会のみならず，多くの国際競技連盟がフランス人の影響下で一次大戦前から設立されていた．1904年には国際サッカー連盟（Fédération Internationale de Football Association）と国際自動車連盟（Fédération Internationale de l'Automobile）がフランス人を会長において設立されており，フランス人が会長職に就かなくとも，1908年の国際水泳連盟（Fédération Internationale de Natation）や1913年の国際フェンシング連盟（Fédération Internationale d'Escrime）などの設立に際しては，フランスが主導的な立場に立っていた[38]．現在に至るまで，これらの連盟の略称は，フランス語の「FI（Fédération Internationale）」から始まるが，ここにはフランスが国際スポーツ界の組織化に果たした役割が表れている．

統一化された規則のもとでの国際組織の形成は，CNSにつながるフランスの普遍主義に由来している．すなわち，法のもとで宗教や文化，人種や民族に関わらず，人間の平等を保障するという考え方である．フランスは，国際的なスポーツの世界において，この普遍主義モデルを推進していった[39]．そして，そのフランスモデルの推進は，一次大戦後の政治的文脈において加速していくことになる．

すでに見てきたように，第一次大戦以降，スポーツはナショナルな意味合いを帯びるようになって

いた．国際社会での政治的影響力を取り戻したいフランスとしては，国際大会で勝利することに加えて，国際スポーツの組織化を通じて世界に影響力を示すことも大きな意味を持っていた．

こうしてフランスは，国内において確立した「一つの連盟が一つの競技を統括する」というモデルのもと，各種国際競技連盟を次々に組織化させていく．1927年時点で14の国際競技連盟の本部がパリやフランス国内に置かれていた[40]．

国際的な組織化を進めるフランスの影響は，さらにIOCにも脅威となっていく．クーベルタンが創設したIOCは，民主的な選挙ではなく，貴族や一部のエリート層が相互的に推薦するかたちでメンバーが選ばれていた．こうしたIOCの非民主性のみならず，厳格なアマチュアリズムに関しても，スポーツの大衆化のなかでプロ化を容認する競技連盟を統括していたCNSのモデルが普及していくことは，IOCにとって看過できない事態であった[41]．

競技連盟の主導とともにフランスは，競技連盟ごとに世界選手権を開催するということをめざして，国際大会を主導的に組織していくようになった．例えば，FIFAで会長を務めていたフランス人のジュール・リメが，1930年にサッカーワールドカップを創設したことは有名であるが[42]，こうした世界一やヨーロッパチャンピオンを決める大会の前に，フランスは国家間の対抗戦の開催を積極的に組織していった．一次大戦後に国際試合が増えていたことはすでに述べたが，これを中心的に推進したのもフランスであった．

1920年から1924年の間にフランスの代表チームが実施した対抗戦は延べ84回にのぼったが，このうち半数以上は，サッカー，ラグビー，陸上競技の試合であった．だが，これら3つの試合の対戦相手は全て一次大戦の連合国であった．特に英国との対抗戦だけで41回（うち対イングランドが24回），また，地続きのベルギーとも17回の試合を行っている[43]．

また，1924年までフランスの対戦相手は，イギリスやベルギーに加え，イタリア，スイスなど，一次大戦の連合国あるいは中立国との対戦にとどまっていた．大戦で敵対した中央同盟国側との対戦は，1925年にオーストリアとの間で行われたサッカーの対抗戦が最初である．また，ドイツとの試合は陸上競技の対抗戦が行われた1926年が最初であり，これはドイツが国際連盟に加盟する年であった[44]．

このように政治情勢が国際スポーツ界にダイレクトに影響するようになるなかで，その組織化にフランスは主導的な役割を果たそうとしてきた．そして，そのフランスが国際的に「威信」を示すうえで絶好の機会となるのが，1924年パリ五輪の開催であった．先に述べたようにこのパリ五輪の招致の成功には，クーベルタンの意向によるところが大きかったとされる[45]．

ところが，本節でみたように，クーベルタンは一次大戦後のフランス・スポーツ界においては，もはや中心人物ではなくなっていた．そうしたなかで，パリ五輪の開催に向けてスポーツ界とクーベルタンのあいだでどのような議論があったのだろうか．あるいは，クーベルタンはどのような役割を果たしたのだろうか．

3．1924年パリ五輪の開催とクーベルタン

3-1　1920年アントワープ大会

クーベルタンは第一次大戦期にフランスを離れ，スイスのローザンヌに移住していた．国内スポーツ界での存在感が薄くなってくなかで，最大の流通量を誇ったスポーツ紙の『ロト』においても，クーベルタンへの言及は減少していた[46]．

一次大戦が終わり，戦前から開催が予定されていた1920年のオリンピックについて，クーベルタンは独自にベルギーの関係者たちと会談し，1920年のオリンピック大会をベルギーのアントワープで開催することに合意した[47]．

しかしながら，戦禍の残るヨーロッパにおいてオリンピックを開催することは容易ではなく，ベ

ルギーも一度は断っていた．ベルギーが断り続けた場合には，フランスのパリやリヨンなどで開催する可能性についてもクーベルタンは言及していた．一方で，クーベルタンに批判的だったCNSは，フランスがヴェルサイユ条約でドイツから獲得したアルザスでのオリンピック開催を望み，クーベルタンへの抗議を示した[48]．

また，こうしたIOCの議論に関して，フランスでオリンピックに関する決定をするはずのフランスオリンピック委員会（COF）は全く関与できていなかった．IOCへのフランス代表者は，クーベルタンによって選出されていたのである．かつて存在した全国オリンピック委員会は，もっぱらクーベルタンによって選ばれた人々で構成されていたのだが，各種競技連盟の働きかけにより1913年に設置されたCOFは，各種連盟の代表から構成されることになっていた．ところが，IOCへのフランスからの派遣者は，クーベルタンが独断で決めていたという．これによってIOCの決定を，フランスオリンピック委員会が全く知らないという事態が生じてしまった[49]．クーベルタンはフランスのスポーツ界の意見をないがしろにしていたのである．

COF会長のジュスティニアン・クラリーは，オリンピックにおけるクーベルタンの独裁的な姿勢も批判し，IOCは「彼（クーベルタン）が思うがままに構成」し，クーベルタンが「その方向性を指揮する」と指摘した．さらに，「ピエール・ド・クーベルタン氏が同じ国の人間であるフランス人を黙殺しているように思われる」として，オリンピックに関する情報をフランス・スポーツ界に提供しないクーベルタンは強く批判された[50]．

批判はそれだけでなく，フランスが一次大戦で敵対した国に対するクーベルタンの寛容な態度も非難された．戦後にスポーツ・ナショナリズムが高まりゆくなかで，クーベルタンの「平和的な」姿勢はスポーツ界からの非難の対象となった．中立国のスイス・ローザンヌでIOCの会議が行われたことで，ドイツやオーストリアなどもそこから排除されることがなかった．ナショナリズムが高まるフランス・スポーツ界にとっては，かつての敵国に対してクーベルタンは「彼らを断ち切るために何もしなかったように思われる」のであった[51]．それまでクーベルタンが抱いてきたオリンピックの平和的理念からすれば，こうした中央同盟国への寛容な態度は当然のことであるように思われる．ところがそれは，戦禍の残るフランスの世論や政治化するスポーツ界とは大きくかけ離れていたのであった．

こうして，フランス・スポーツ界で中心を占めるようになっていた人々が議論に参加することなく，1920年のアントワープ五輪が開催されることになった．これに対してスポーツジャーナリストのポール・シャンは，「恐ろしい世界大戦で甚大な被害を受けたフランスは特に不利な条件である」として，「フランスのどの連盟も，競技的又は財政的に準備する実時間はないだろう」と分析している[52]．

一方のクーベルタンも，公教育省の体育スポーツ課長を務めたガストン・ヴィダルや国内外の競技連盟が，IOCの「特権」を侵食することを看過できなかった[53]．IOCを主導するクーベルタンと，フランス国内スポーツ界の中心を占めるようになった人々や各種競技連盟は，ますます対立を深めていくように思われた．

3-2　1924年オリンピック大会の招致をめぐって

1920年の大会が終わると，1924年の第8回大会の開催地に関する議論が高まってくる．「スポーツは国家の事柄になった」と述べたガストン・ヴィダルは，アントワープ大会の直後から「1924年のオリンピック大会はパリで行われるべきである」といち早く主張した[54]．ヴィダルにとって，1924年のオリンピックをパリで開催することはフランス・スポーツの存在感を国際舞台に示すには絶好の機会だったのである．

他方で，IOCを牛耳っていたクーベルタンも，

フランス・パリでの大会開催を望むようになっていた．もともと1924年大会の候補地としては，フランス･パリの他にオランダのアムステルダム，アメリカ・ロサンゼルス，イタリア・ローマが名乗りを上げていたが，なかでもオランダのアムステルダムがもっとも有力であり，クーベルタンもそのことは理解していた．しかし，クーベルタンは，1924年がIOC設立から30年の記念であることを理由に，パリ開催を希望した．そのことを綴ったフランスの関係者宛の書簡が1921年3月20日の『ロト』に紹介されている．

> 達成目前のその固有の偉業から考えれば，入念に準備され，1894年6月23日にオリンピックの復興が盛大に宣言されたその生まれ故郷の地，すなわちパリに対して，例外的に特別な計らいがなされることを要望する権利について，オリンピックの改革者たちに異議を唱える者はいないだろう．（中略）したがって，私は次回の会合の際に，（中略）第9回大会をアムステルダムに割り当てることと第8回大会のパリ開催を主張することを受け入れてもらうよう訴えかけていきたいと思う[55]．

有力であったアムステルダムを後回しにしてパリを開催地にしたいというのは，クーベルタンの強引な提案と思われる．だが，これに対して，アントワープ大会をめぐってクーベルタンに辛辣な批判を展開していたはずの『ロト』紙の論調も，それまでとは打って変わって，クーベルタンの提案を歓迎しているように思われた．

> あとは6月2日のローザンヌで招集される会合での決定を待つだけだが，クーベルタン氏の提案が，彼が30年以上前から取り仕切ってきた委員会のメンバーによって可決されるであろうということを私たちは納得している[56]．

こうして1924年の大会はパリで開催することがIOC総会で決定された．さらに，大会終了後にはクーベルタンがIOCの会長職を勇退することも公にした．10月27日の『ロト』紙には，パリで行われた会議におけるクーベルタンの談話が紹介されている．クーベルタンによれば「いまだスポーツは，その背後に一握りのスポーツマンが隠れているような人為的な装いでしかない」し，「スポーツはいまだ人間にとって自然のものではない」という．また，クーベルタンは「ますます知的エリートがスポーツの大義に魅了されることを望んで」おり，そのためには「スポーツは見世物的なプロフェッショナリズムに陥ってはならない」と考えていた[57]．一次大戦後にスポーツ界が変化していくなかにおいても，依然としてクーベルタンはオリンピックが大衆化していくことは望んでいなかったかのように思われる．

3-3　パリ五輪の開催と国際スポーツ界

ところが，1922年に入ると，「パリ市の財源不足に対して，政府は見積もり2000万フランの財政支出を認められるのか」として，パリでの開催が財政的な理由で危ぶまれていることが明るみに出た．それでもクーベルタンはパリでの開催を望んだが，他の人々のあいだでは現実的な対応策としてフランス第二の都市であるリヨンでの開催も検討されるに至った[58]．

大会の開催危機は政府や国民議会，すなわちフランス全体の政治問題へと発展していった．政府にとっては「フランスの威信が危機に瀕して」おり，「『オリンピックの泥船』から抜け出す方法を見つけ出す」ことが必要であった[59]．一度決まったパリでの開催ができなくなるということは，フランスの国益を損ないうる問題だったのであり，政治的な関与を免れえなくなっていた．

スポーツ界の重鎮であり，政治家でもあったガストン・ヴィダルは，この問題を協議するためにCOF会長のジュスティニアン・クラリーを伴って，首相の事務次官であるモーリス・コルラを訪問した．そして，この三者会談ののち，コルラは

「もしもの場合に無能なパリの代わりに第8回オリンピック大会の開催地としてリヨンが選択されるためにはどのような手続きを取るべきなのかを知るために，クーベルタンの知恵に頼ることを決めた」．政治家もスポーツ関係者も，都市を変えてでもフランスで開催することを望んでいたのである．

だが，コルラがクーベルタンに意見を聞く前に，ヴィダルはさらにアレクサンドル・ミルラン大統領のもとを訪れていた．ヴィダルの働きかけにより，ミルランは閣僚評議会でこの問題を取り扱うことになり，「オリンピック委員会がフランスで大会を開催できるという明確な意思を主張するための唯一の存在として閣僚評議会は結集した」[60]．

一方で，クーベルタンは「1924年のオリンピック大会は，フランスの他のどの都市でもなく，パリだけに与えられたのである」と主張し，オリンピックはそもそも都市単位で開催するものという理念のもと，あくまでもIOCの決定を強調してパリでの開催を望んでいた．さらに，「仮にパリが開催を断念するならロサンゼルスを選出するという誓約がなされている」ことも伝えた．その年の6月にパリで行われるIOCの会議の時点で「フランスオリンピック委員会がパリで開催できるかを伝えられなければ」，「第8回オリンピックは自動的にロサンゼルスになるだろう」ということをクーベルタンは『ロト』紙に伝えている[61]．大戦を通じて経済的利益を得て大国化していたアメリカ合衆国の大都市ロサンゼルスは，オリンピック開催のための準備を着々と進めていたのであった．

このようにフランスの政治関係者やスポーツ関係者は1924年のオリンピックはパリに限らずともフランス国内で開催したいと考えたのに対し，クーベルタンはフランス国内ということにこだわらずパリで開催できなければロサンゼルスで開催されるべきと考えた．国家の威信を示すべく何としてもフランス国内のどこかで開催したいスポーツ界と，あくまでも都市開催ということでフランス国内での開催にこだわらないクーベルタンとの，オリンピックに対する考え方の乖離が見て取れるだろう．

こうして1924年大会開催地の最終決定の期日が迫るなか，国民議会下院の財務委員会でも，パリ開催の費用の捻出について議論されることになった．リヨン市長であり下院議員を務めていたエドゥアール・エリオは，パリが「大会の開催にいまだになんの資本投入もできていなかった」のに対し「すでにスタジアムの整備に300万フランを費やしていた」ことを強調して，リヨンで1924年大会を開催することができると主張した．エリオの所見は，財務委員会にも魅力的に思われた[62]．

ところが，「オリンピック大会が1つの国ではなく1つの都市に充てられているということを知った」財務委員会は，リヨン案を採用することはできなかった．リヨンでの開催をIOCに提案することは，すなわちパリでの開催が不可能であることを意味し，そうなると開催地がロサンゼルスに移ってしまうことが濃厚であると考えられたからである．こうして，財務委員会は何とかパリで開催する方法を模索し，2000万フランと言われていた当初の予算から，1500万フランで開催できると下方修正し，そのうちの600万の予算を政府に求める案を提示することに決定した．COFは，この財務委員会の決定に落胆し，なかには「国際オリンピック委員会に返上して終わりにしよう」という声も上がっていたという[63]．

このように予算をめぐる議論はあったものの，結果的には政府の上層部が1000万フランの予算補助を決定したことを知り，COFは「あらゆる手段を講じてパリ開催を進めていくことを決断した」．政府の意向としては「選手や外国の役員たちを寛大に受け入れ，フランスが常に歓待の場であるということを示すこと」が重要であるということだった[64]．財源不足という現実的な課題を前にしても，自国でオリンピックを開催することには対外的な政治的意味を見出していたのである．

このように，なんとしてもフランス国内でオリンピック大会を開催したい政府の意向と，パリでの開催を望んでいたクーベルタンの意向は,「1924年にオリンピック大会をパリで開催する」という点で一致することになった.

こうして1922年6月7日のIOC総会で，1924年大会のパリ開催が正式に決定した．これを受けて『ロト』紙も,「IOCにおける（クーベルタンの）権威は絶大で，共感が得られ，同委員会の主要な各国代表で再び満場一致になるのに苦労はしなかった」とクーベルタンのIOCにおける影響力を好意的に評価した[65].

パリ開催という本来の決定に落ち着いたのだが,『ロト』紙は「オリンピック大会はフランスに残った」という見出しを打って，フランス国内で開催されるということを強調した[66]．フランスの政治家やスポーツ関係者が抱いていたような，オリンピックを開催することによってフランスの「威信」を示すというナショナルな意識がここにもみられる.

パリ五輪の競技成績に関しては，フランスが獲得したメダルの数は，金メダル14個，銀メダル14個，銅メダル13個で，アメリカに次いで2位となった．だが，1位のアメリカは金45個，銀27個，銅27個を獲得し，フランスに大差をつけていた．また，フランスでの金メダル獲得は，得意競技のフェンシングや自転車によるところが大きく，国家の「強さ」を示すとされたような陸上競技や水泳でなどでは平凡な成績に終わった[67].

また，パリ五輪においてもドイツの参加は認められなかった．クーベルタンやIOCはスポーツを通じて独仏の和解を実現し，パリ五輪を「平和の大会」にすることを目指していたが，フランス国内の世論や政治家，競技連盟などの反対が大きかった[68]．甚大な被害を受けた大戦の影響は大きく，ドイツの選手団が訪れることをフランスの人々は受け入れられなかったのである．パリ五輪はクーベルタンの影響力を伴って開催が実現したが，彼の理念に反してオリンピックは，もはや政治との結びつきを免れることはできなかった.

他方で，IOCと各種競技連盟の関係は変化しつつあった．もちろん，FIFAのように依然としてIOCと緊張関係にあり続けた競技連盟も存在したが，特にスポーツごとの専門的・技術的な側面において，一つの競技を統括する各種国際競技連盟と，IOCの相互協力が見られるようになる．1925年には，フランスのガストン・ヴィダルがIOCのメンバーに各種競技連盟からの代表を入れることを求め，自身がその立場に就いた[69].

だが，これについてもクーベルタンは受け入れられなかった．彼はIOC会長を退いた後も，会長職を継いだアンリ・ド・バイエ＝ラトゥールに次のような書簡を送っている.

> 私は，IOCが専門技術に関することにも手を出すようになってIOC自身を損なっていることを確信し続けている．そして，IOCの真の役割は哲学的教育などを保護することであり，したがって，ヴィダルのような狂人に接近することは受け入れられないのである[70].

このように第一次世界大戦後のオリンピックをめぐっては，フランス国内の状況と国際スポーツ界，クーベルタンにそれぞれの思惑がありながら，相互に関連しあって展開していったのである.

4．おわりに

第一次大戦後を経た欧米諸国では，スポーツがナショナリズムを喚起させるものとして認識されるようになり，政治的な影響を強く受けるようになっていった．他方のフランスでは，スポーツ界が大衆化するとともに組織的再編が起こった．そして，一次大戦を通じて低下した国家の威信を取り戻すべく新たな国際秩序の形成を主導したい自国の対外政策と一致するように，国際的なスポーツの組織化をフランスのモデルで主導していこうと試みた.

他方で，オリンピックを創始したピエール・ド・クーベルタンは，自身が構想していた平和的理念とは異なるかたちでスポーツの国際化を主導したフランス国内のスポーツ界から離れていった．

だが，結果的に 1924 年のオリンピック大会は，クーベルタンの IOC への影響力とフランス・スポーツ界や政府の意向とが「フランス・パリでの開催」という点で一致するかたちで決定した．政治化するスポーツとオリンピックの理念とのあいだを揺れ動きながら 1924 年のパリ五輪は実現したといえるだろう．

フランスに関して，一次大戦は「現代」の始まりとされている．国際的には各国の繋がりが複雑に関連しあうようになり，他方で国内では政治・社会・文化が，大衆化・民主化という方向に変容していった．1924 年のオリンピック・パリ大会をめぐって展開したフランスの国内外の議論は，こうした社会的変化の影響を受けていた．本論文で対象とした時期は，「一競技一連盟」システムの確立とともに，スポーツと政治の関係という点で，現代まで続く国際スポーツ体制の形成における端緒であったといえるだろう．

国際政治という点では，1920 年代後半以降さらに激動の時代を迎えることになる．今後，戦間期全体に対象時期を広げつつ，そのうえでフランス語以外の資料も収集して分析することで，オリンピックやフランスにおけるスポーツと政治の関係について，より重層的に理解することができるようになるだろう．これらについては今後の課題としていきたい．

注および参考文献

（注 1）Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige » In : Milza Pierre, Jequier François et Tétart, Philippe, *Le pouvoir des anneaux : Les jeux olympiques à la lumière de la politique 1896-2004,* pp.99-100. より．オリンピック大会及び，クラブ間などの国際試合は含まない．

1) Saint-Martin, Jean, « Sport, nationalismes et propagande（1918-1939）» In : Tétart, Philippe（dir.）. Histoire du sport en France : du second empire au Règime de Vichy, Vuibert, 2007, p.183.

2) Boniface, Pascal, *JO politiques : Sport et rlations internationales*, Eyrolles, 2016, p.15.

3) *Ibid.,* p.11.

4) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige », p.85.

5) Terret, Thierry, *Histoire du sport*（Collection Que sais-je? 6e édition）, Presses Universitaires de France/Humensis, 2019, p.54.

6) Dietschy, Paul et Clastres, Patrick, *Sport, siciété et culture en France, du XIXe siécle à nos jours*, Hachette Livre, 2006, p.87.

7) Boniface, *op.cit.,* p.51.

8) Riordan, James et Arnaud, Pierre, *Sport et relations internationales (1900-1941)*, L'Harmattan, 1998.

9) Boniface, Pascal, *JO politiques : Sport et rlations internationales,* Eyrolles, 2016 ; Chaix, Pierre（dir.）, *Les Jeux Olympiques de 1924 à 2021 : Impacts, retombées économiques et héritage,* L'Harmattan, 2018 ; Terret, Thierry, *Balades Olympiques : Les chemins politiques,* L'Harmattan, 2020.

10) Saint-Martin, Jean, *op.cit.,* pp.183-185 : Arnaud Pierre, « Le sport, vecteur des représentations nationales des Etats européens » In : Riordan, James et Arnaud, Pierre, *Sport et relations internationales (1900-1941)*, L'Harmattan, 1998, p.15.

11) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle don-

ne géopolitique et enjeux de prestige », pp.99-100.

12) Saint-Martin, Jean, *op.cit.,* p.183.

13) *Ibid.,* p.185.

14) *Le Miroir des sports,* 29 juillet 1920, no.4, p.50.

15) Terret, *Histoire du sport,* p.65.

16) Dietchy, Paul, "French Sport: Caught between Universalism and Exceptionalism", *European Review*, 19(4), 2011, p.512.

17) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige » In : Milza Pierre, Jequier François et Tétart, Philippe, *Le pouvoir des anneaux : Les jeux olympiques à la lumière de la politique 1896-2004*, p.85.

18) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige », p.84.

19) 連合国軍競技大会については，フランス語で詳しい先行研究が存在する（例えばTerret, Thierry, *Les jeux interalliés de 1919: Sport, guerre et relations internationales,* L'Harmattan, 2002など）に詳しい．また，邦語では，小澤英二の「第一次世界大戦後のオリンピックと国家―1920年アントワープ大会へのアメリカ合衆国参加をめぐって―」（近藤英男・稲垣正浩・高橋健夫編著『新世紀スポーツ文化論：体育学論叢（Ⅳ）』タイムス，2001年，184-201頁）や，高嶋航の『軍隊とスポーツの近代』（青弓社，2015年）で大会について言及されている．

20) Dietschy et Clastres, *op.cit.,* p.100.

21) Terret, Thierry, *Histoire du sport*, pp.37-41.

22) *Ibid.,* p.46.

23) Ditchyl, *op.cit.,* p.511.

24) Terret, *Histoire du sport,* p.43.

25) Grosset, Yoan and Attali, Michaël, « The French Initiative towards the Creation of an International Sports Movement 1908-1925: An Alternative to the International Olympic Committee », *Journal of Sport History*, 36(2), 2009, pp.246-247.

26) *Ibid*., p.247.

27) Terret, *Histoire du sport*, p.48.

28) Grosset and Attali, *op.cit*., p.247.

29) *Ibid*., p.248.

30) Terret, *Histoire du sport*, pp.52-53.

31) *Ibid*., p.53.

32) 齋藤健司『フランススポーツ基本法の制定［上巻］』成文堂，2007年，42-43頁.

33) Grosset and Attali, *op.cit*., p.251.

34) *Ibid*., p.248.

35) 吉田徹「フランスと欧州統合―偉大さと葛藤と」吉田徹編『ヨーロッパ統合とフランス：偉大さを求めた1世紀』法律文化社，2012年，1-49頁.

36) Grosset and Attali, *op.cit*., pp.255-256.

37) Dietchy, *op.cit*., p.512.

38) Terret, *Histoire du sport*, pp.47-48.

39) Dietchy, *op.cit*., p.510.

40) Saint-Martin, *op.cit*., p.186.

41) Grosset and Attali, *op.cit*., pp.255-256.

42) Dietschy et Clastres, *op.cit*., p.116.

43) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige », p.85.

44) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige », pp.85-86.

45) Boniface, *op.cit*., p.51.

46) フランス国立図書館の電子データが収められているガリカ（Gallica）では，1900年から1944年8月の廃刊までの『ロト』紙を閲覧することができる．そのなかで「Coubertin」というキーワードで検索すると，一次大戦勃発年の1914年には27件がヒットするが，戦後

の 1919 年には 12 件，1920 年には 7 件にとどまっている．だが，パリ五輪開催の議論のなかで 1921 年に 24 件，1922 年に 26 件，1923 年に 30 件と増大していき，五輪開催年となる 1924 年には 52 件がヒットする．

47) *L'Auto*, 21 février 1919, p.1.

48) *Ibid*.

49) Champ, Paul « Questions Olympiennes », *L'Auto*, 2 avril 1919, p.3.

50) *L'Auto*, 19 mars 1919, p.1.

51) *L'Auto*, 31 mars 1919, p.1.

52) Champ, Paul « Questions Olympiennes », *L'Auto*, 2 avril 1919, p.3.

53) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige », p.89.

54) *Le Miroir des sports*, no.16, 21 octobre 1920, p.242.

55) « Aurons-nous à Paris l'Olympiade de 1924 ? », *L'Auto*, 20 mars 1921, p.1.

56) *Ibid*.

57) *L'Auto*, 27 octobre 1921, p.4.

58) « L'enterrement des jeux olympiques », *L'Auto,* 13 mars 1922, p.1.

59) « La solution dépend du Gouvernement et du Parlement », *L'Auto*, 13 mars 1924, p.1.

60) *L'Auto*, 15 mars 1922, p.1.

61) *L'Auto*, 16 mars 1922, p.1.

62) *L'Auto*, 1 june 1922, p.1.

63) « Le Match entre Paris et Los Angelès », *L'Auto*, 2 june 1922, p.1.

64) *L'Auto*, 7 june 1922, p.1.

65) « Les jeux olympiques restent à la France », *L'Auto*, 8 june 1922, p.1.

66) *Ibid*.

67) Dietschy et Clastres, *op.cit*., p.115.

68) Arnaud, Pierre « Sports et olympisme après la Première Guerre mondiale : nouvelle donne géopolitique et enjeux de prestige », p.89.

69) Grosset and Attali, *op.cit*., p.256.

70) *Ibid*., p.262.

（受理日：2021 年 4 月 12 日）